

十二月十四日

昨日より世田谷村の一階旧屋の解体が始まる。今日は朝から解体工事が盛んだ。ようやくにして旧屋が建つ前の本来の大地が出現することになる。色んな事がここで展開できるだろう。世田谷村の一階部分、つまり大地はチョツと不思議なスペースになるだろうと予測していた。謂はゆるピロティであるがコルビュジェ風のピロティではない。もっと軽くて、建築の重量を解放してゆくような感じを狙った。計算通りにうまくゆけば、まだ見たこともない空間が出現する筈なのだが、工事を始めて二年経ち、ようやくにしてその空間を体験する事ができる。

室内・スタジオボイス連載原稿送る。今回は両方共上手く書けたような気がする。書いて面白かった。午後大学へ。今日は沢山な人に会わなくてはならない。

六時ザ・羽澤ガーデンで野田一夫宮城大学前学長と会食。羽澤ガーデンは広尾の小高い丘の上にある和風の邸宅を転用したレストラン。野田氏の息子さんがオーナーとの事。まだ三十三才という事で、レストラン自体の考え方がユニークなので是非その三十三才に会いたくなって、初対面の野田一夫さんをお願いして紹介してもらった。三十三才のオーナーは野田豊氏、聞けば京都、神戸その他にすでに七件のレストランを持つという。仲々痛快な青年だった。狙いが良い。国際文化会館、ホテルオークラをいつか手掛けたいとの事。この青年ならやるだろう。私のやりたい事

に対する良い刺激にもなった。若い人にも人物はいるものだ。野田一夫さんともお近付になれて良かった。野田豊さんの実業家としての新しさは、すでに在るモノを使い直して全く新しいモノへと作り直してゆく手法をビジネスとして定着させていることだろう。新築世代ではない改築、転用世代のビジネス感覚が溢れている。

十二月十五日

朝七時横須賀へ。昼、又今日も広尾のイタリアン・レストランで高木松井結婚式。夜西調布、聖徳寺霊園打ち合わせ。世田谷村一階旧屋の解体おおかた終了。一階に予想通り不思議な空間が出現した。

十二月十六日

早朝四時起床。六時二十分登戸集合で今日は星の子愛児園の保母さん達三十三名と伊豆松崎町へ出掛ける。早朝の電車に何故こんな沢山な人がいるのか。昨夜ライカに初めて自力でフィルムを入れる事ができた。コノヤローって感じになって異常な困難さを克服した。こんな努力しなければならぬ道具も珍しいだろう。これで写らなきゃ本当にライカは馬鹿カメラだ。

ただいま六時前小田急線車中。まだまっくら。東の空にホンノリ、実にわずかに色がついてきた。今日は一日が長そうだ。小田急線車中ほぼ座席は人でいっぱい。皆眠りこけている。夜中何をしていたのかね。

登戸駅よりバスで松崎へ。バスではクイズなんかやったりして、それでも結構楽しくやった。私自身の新しい面を発見してしまった。若い女性ばかり三十数名とクイズを楽しむ自分がいるなんて。

富士山が雪をかぶって見事である。

予定通り十時に伊豆長八美術館。森町長公室長が出迎えてくれた。面目ない。長八美術館および町をそぞろ歩きで案内する。保母さん達はどう感じてくれたのだろうか。これから出来る星の子愛児園を好きになってくれたら嬉しいのだが。愛児園は長八美術館よりもっと都市的な建築だから好きになってもらうのは容易な気がする。保母さんが好きになってくれたら、それは良く使ってもらうのに一番だから。子供を好きじゃないと保母さんはできない。建築だって好きになってもらいたいのだ。

昼、近藤理事長園長保母さん達とお別れして、そば屋小邨へ。佐藤健が待っていた。シルクロードの旅を終えただけの健さんとの再会。少し疲れ気味な顔だったが無事なので安心。小邨小林の心尽しのソバをいただく。結局サンセットヒル宿泊室二一と二二に泊ることにした。夜うなぎを喰べて、十時に休む。酒を飲まないと実に健康である。ハンマに住宅の模型を渡す。余程心配だったようで、かなり普通の感じだったのでホッとしていたようだ。

十二月十七日

朝六時起床。新潮社の藤塚光政著、「身近なサイエンス」書評というよりも宣伝文四、五枚書く。シテイボーイ藤塚とシテイボーイチャンピオン山本夏彦という、全く書評になっていないやつ。温泉に入ってから書いて、八時前に終った。本当やれば出来るのだ。室内長井とのやり取りもあって、相変わらず原稿はつな渡りの連続である。しかし長いやつを書かねば頭がダメになりそうな気がしてならぬ。八時朝食。森、田口両氏が会いに来てくれて、本当に松崎の人たちは心が柔らかい。だからこそ甘えてはい

けないのだ。ハンマの車で安良里へ。佐藤健がハンマの漁船を見たいと言うので。七十九トン第十三宝幸丸を見る。ハンマの住宅建設地も再び見る。ハンマは模型と土地の合成写真までコンピュータで作ってきた。昨夜作つたらしい。こちらも本気でやる気になってしまった。

昼前再び小林の小邨でソバガキを食べて、帰京。ハンマは明日今年最後の出漁だと言う。三宅島までの漁でエサ代が五〇万円油代が十万円そこそこらしい。こういう仕事が成り立たなくなったら日本も終りだ。幸運をいのりしたい。

帰りの汽車は佐藤健と宗教と建築のことなど話しながらだったのでアツという間だった。

三時過東京着健さんと別れて、大学へ。東大松村研佐藤君来室コンバージョンの件。夜は世田谷で一つ模型撮影をしなくては。ライカでとった写真ができていて海のブルーが美しくとれていた。